

---

# ボウケンジャーVSルパンfamily

風蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボウケンジャーVSルパンfamily

### 【Nコード】

N5850Y

### 【作者名】

風蒼

### 【あらすじ】

世界一の大泥棒、ルパン一味はSGSからお宝を盗み出し、その謎を解くことができるのか？

## 第0話（前書き）

前に、世界を翔る銀の閃光のお願いした感想でルパンの世界に行くというのがあったのですが、まだまだいけそうにないので、別設定でかいて見ました。

ほかのもあるのですがすごく不定期になると思いますが、興味があるなら見てみてください。

## 第0話

10月31日、サージェス保管のプレシヤス神の雫を戴きに参ります。      Lupin?

その日、サージェスに一通の手紙が届いた。

それは国際指名手配の大泥棒、ルパン三世からだった。

予告状にあった神の雫とは、1週間程前にボウケンジャーの6人が山奥の洞窟で見つけた拳より小さめの宝石だった。

その宝石は、ある条件が揃ったとき奇跡が起こると言われている。

その条件とは、『蒼い月の夜、星の祭壇へと雫を捧げよ。神の笛の音と共に。さすれば、奇跡起こらん』

蒼い月とは何か、祭壇とは何処か、神の笛の音とはどのようなものか？

6人の冒険者と4人の泥棒が出会い、笛の音が響くとき時を超

えた奇跡が起こる。

## 第一話

10月23日。この日、三人組の男たちがサージェスの博物館を訪れた。

1人は、猿顔で赤いジャケットに黄色いネクタイの男。2人は黒いスーツに顎髭、黒い帽子の男。3人目は水色の袴を着て、腰には刀を差した男。3人が3人とも、この場どころか普通にしている。確実に浮くだろう装いをしている。

「おいルパン、ほんとにこんな所にその宝石とやらがあるのか？」

スーツの男が、赤ジャケットの男に言う。

「もっちゃん。ほら、向こうを見てみな」

赤ジャケットの男、ルパンがさういうと2人は彼が示したところを見ると、確かにケースに入った水晶のようなものがあつた。

「ほう、見事な水晶だな」

「だろ」。さっすが五右衛門、わかってるね」

袴の男、五右衛門が感心したように、呟くとルパンは嬉しそうに言う。

「けっ、ただの石じゃねえか。また不二子のやつにでも強請られたんだろっ」

「そういうなよ次元」

スーツの男、次元があまり興味がなさそうに言う。ルパンはそれを宥めるように続けた。

「あれは、ただの水晶じゃないんだぜ」

2人は、どうということだというように彼をみる。それに、不敵に笑うと言った。

「『蒼い月の夜、星の祭壇へと雫を捧げよ。神の笛の音と共に。さすれば、奇跡起こらん』」

「どうということだ？」

次元の問いにルパンが答えようとすると、別な声がそこに割り込んだ。

「よく知っていますね。それは神の雫についての伝承です」

3人が声の方を見ると、そこには青と茶のジャケットを着た青年が微笑みながら立っていた。

「まあな、おれっちは博識だからよ。ところであんたは？」

「これは失礼しました。僕は最上蒼太、ここサージエスの学芸員をしています。今は館内の見回り中」

彼らから少し離れたところに銀のジャケットを着た青年が1人壁に寄り掛かるようにして、じつと4人正確には3人を見ていた。

「あいつら、何か嫌な予感がするぜ。それに、どっかで見たことあるような気がすんだよなあ」

「どうした、映士。何を見てるんだ？」

「明石か」

赤と茶のジャケットを着た青年、明石が銀のジャケットの青年、映士に声を掛けた。そして、彼の見ているもの気づいたのかそちらを見ると蒼太と3人の男が話をしていた。

「あの人たちがどうかしたのか？」

「あいつら、只者じゃない。一般人を装っちゃいるが、隙がない」

「何？」

そう言われてもう一度よく見ようとすると、映士が呟くようにやめると制した。

「あんまりそっちを見るな、気づかれる。さっき蒼太とも話してな。今、情報収集に行ってもらってる」

「なるほどな。だが、お前たちのいうことを疑うわけじゃない

がそこまで警戒することがあるのか？ただの武道家とかじゃないか」

「おまえ、本気で言ってるのか？あの袴の奴はともかく、他の2人がそんな風に見えるか？」

映士が呆れたような目で明石を見る。

「見えない、な」

当たり前だというように映士は溜息を吐いた。

「だが、油断ならないのは確かだろう？それに、お前たちがそんなことをするなんて何か理由があるんだろう」

明石は、咳払いをひとつするとそう訊ねた。

「まあな。俺様の勘もあるが、俺様も蒼太もあいつらに見覚えがある気がするんだ。それも、あんまりいい方じゃなくな」

「なるほどな」

蒼太と映士、両方に見覚えがあるなら確かに警戒した方がいいだろう。それに、映士の勘も馬鹿にはできない。

「どちらにしても、今は蒼太待ちだけだな」

そう言つて、2人は彼らの方に一度だけ視線を向けた。

「へー、ここの職員さんか。よかつたら、詳しく教えてくれな  
いか」

「いいですよ。あれは『神の雫』というものです。つい最近見  
つかったもので、僕たちにもよくはわかっていないんですよ」

「ありゃ、そうなの？」

「ええ、そうなんですよ」

蒼太は申し訳なさそうにしながらそう告げた。

「じゃあ、おたくらはあの伝承についてどういう解釈をしてる  
んだ？」

「そうですね、伝承にある蒼い月というのはおそらくブルー  
ムーン、満月のことだと思います。満月の晩に、星の見える祭壇に  
笛の音と共に捧げる。昔の儀式の一種だと思いますよ。それも神の。  
だから、そんな伝承が残ったんでしょう」

そういうと、よかつたらどうぞ、と3人にその宝石の説明が書  
かれた紙を渡した。

「僕からも質問していいですか？」

「おう、かまわないぜ」

ずっと、蒼太の眼が細まったと思うと

「こんなことをいうのは失礼かもしれませんが、どこかでお会いしたことがありますか？」

と言った。

それを聞いて、にこにこ笑みを浮かべていたルパンも、つまらなそうに話を聞いていた次元と五右衛門も一瞬だが強張った表情を浮かべた。

「ああ、気を悪くさせたのならすいません。どうにも見覚えがあったものですから」

すまなそうに頭を下げるが、その目は何かを探るようなものだった。

「いや、別にそんなことはねえけどよ。ちなみに、見覚えがあるってどこでだ？」

3人もすぐに表情を戻すとそう言った。蒼太はそれに少し考えるそぶりを見ると、答えた。

「そうですね、……実はあまりよくは覚えていないですよ。今まで色々なところに行きましたから。何処かの山の中か、海岸か、博物館。いや、行きつけの店？それとも、外国か雑誌か何か？ああ、もしかしてあなた達も冒険者か何かですか？」

蒼太が半ば呟くように言う。そして、もしかしてと言うようににこりといった。

「冒険者ねえ。まあ、そんなもんだな」

今まで黙っていた次元が答えた。

「くだらん」

五右衛門は、吐き捨てるように言った。

「こいつらの言ったことはあんまり気にしないでいいぜ。でも  
そつだな、博物館とかにはよく行ってるぜ。冒険も結構してるな」

「へえ、今までどんな宝を見つけたんですか？」

「いろいろだな。絵画に宝石、刀に楽器、古文書に薬とかな」

「それは凄い。ぜひとも一度拝見したいですね」

「まあ、機会があったらな」

そつ言つて、3人は博物館を後にした。

## 第二話

「さて、気づいたか？」

博物館の近くの喫茶店。そこに入った3人は、コーヒーを頼み向き合うとルパンがそう切り出した。

「ああ、あの学芸員と名乗ったやつ俺たちのことを探ってたな」

「それだけではござらん。少し離れたところで、何者かがこちらを覗っていた。すぐに視線がそれたから誰かはわからなかったでござるが」

そういうと、3人は出てきたばかりの建物を見やった。

「どうやら、一筋縄ではいかないようだぜ」

「あいつら、気づいてやがったな」

3人を見送った蒼太に、映士と明石が近づいてきた。

「そうみたいだね。さて、君の見立てを聞こうか監視者殿？」

映士の言葉に蒼太はくすりと笑って言った。それに、映士は不

敵に笑った。そんな2人に、明石は呆れたように溜息を吐いた。

「お前達、話すならサロンで話せ。ここじゃお客さんの邪魔になる。それに、お前達だけで話すことではないだろう」

「どうしたんだよ、いきなり召集なんか出して」

「そんな言い方はないですよ、真墨」

「そうだよ。でも、蒼太さんと映ちゃんは？」

サロンには、明石が連絡を入れ真墨、さくら、菜月が集まった。だが、菜月が言った通りそこに2人の姿はない。

「あいつらは今、取ってくるものがあると言ってどこかへ行った。すぐに戻ってくるだろう」

明石は、リモコンを手にとると画面をつけた。そこに映ったのは、サージェスの監視カメラの映像だった。

「これが何か？」

さくらが不思議に思い尋ねると、ある場所を指しそれを拡大した。そこには、蒼太と3人の人物が映っていた。

「何だこいつら？」

「変な恰好」

真墨や、菜月がそれぞれ感想をいうと明石が説明を始めた。

「この3人の名前は、赤ジャケットの男がルパン。黒スーツの男が次元、袴の男が五右衛門というらしい」

「この3人がどうかしたんですか？」

さくらが聞くと、彼は困ったように言った。

「実は、蒼太と映土が見覚えがあるというんだ。それに映土が嫌な予勘がするそうだ、警戒した方がいいだろう」

そう言ったところで、扉が開き2人が入ってきた。

「すいません、遅れました」

「探し物に手間取った」

2人は口ぐち言うのと、手にしていたものをテーブルに置いた。

蒼太が持ってきたのは、顔写真付きの資料。映土が持ってきたのは、同じく何かの資料と何かの古文書。

「これは？」

さくらが、まず蒼太に訊ねた。

「昔の知り合いに頼んで取り寄せて貰ったICPOの資料です」

蒼太はさりと云ったが、それに映士以外の4人が目を剥いた。そんな国際組織の資料を、ちよつと図書館で借りてきたというような感じで言われたのだから無理もない。

「ICPOって……」

「蒼太さん、すごい」

そんな中、映士はその資料の1枚を手に取り目を通した。

「高丘さん、そちらに目を通す前にあなたの持ってきたものについての説明をお願いします」

さくらの言葉に、彼は資料を読みながら言った。

「政府の揉み消した窃盗犯罪資料一覧と、高丘の過去に盗難にあいかけたものが載ってる古文書」

映士もまた、蒼太同様何でもないことのように言った。周りの四人の呆氣にとられた顔など気づいていないようで、2人は次々に資料を読んでいる。

「おまえ、そんなもの一体どこから持ってきたんだよ」

真墨が恐る恐ると言ったように訊ねた。その眼は、まさか、盗んだとかじゃないだろうなと言っていた。

「貰った」

「誰に？」

「んー、政府のお偉いさん」

嘘かホントかそんなことを言った。

「ちよつと脅してやったら、快く渡してくれたぜ」

いや、脅すなよ。そんなことして、俺達大丈夫なのかよ？殺されたり、逮捕されたりしないよな？

「別に大丈夫だろ。元々大した度胸もない臆病者だ、殺される危険を冒してまで手は出してこないだろう」

言いたいことを読み取った彼はさらっと言った。

「へえ、映ちゃんそんな偉い人と知り合いなんだ。すごいね」

いや、すごいじゃないだろ。菜月の言葉に、そう思ったが誰も突っ込まなかった。言っても、さらにすごい発言が飛び出してきそうだからだ。

「それで、彼らが怪しいと思った理由と観察の感想をお願いします」

さくらがそついうと、蒼太と映士は目を合わせて頷いた。

「まず僕たちが怪しいと思ったのは、恰好。いくらなんでもあんな恰好でこんなところに来るなんて、ありえないでしょう？他にも、

彼らはいろいろなものを見ていたけど、どうも何か探しているようだったんだ」

「そして、あいつらが目を止めたのは例の水晶だ。あいつらはそれを見てこう言っていた。『ただの石じゃねえか。また不二子のやつにでも強請られたんだろう』、『ただの水晶じゃないんだぜ』、てな。何より、アシュが獲物を狙う時と同じ目をしていた」

「普通、展示物を見に来るのに強請られてなんて言わないでしょ？だから、探りに行ったんだけど、彼らは伝説について知っていた。そして、その解釈を僕に聞いてきた」

「けど、そんなの興味があるなら誰でも聞くんじゃない？菜月だつて気になるもん」

彼女が首を傾げて言った。確かに、菜月のように純粹で幼い心の持ち主や、明石のような冒険馬鹿、映土のような特殊な職業のものなら気にはなるだろ。

だが、あの3人のような大人がそんなことに興味を持つのはおかしい。それも、あの眼はまるで何かを見極めようとしていた。

「恐らくだが、あいつらは犯罪者。それも泥棒だ」

「泥棒？どういうことだ」

真墨が眉を顰めながらそう言った。何故、そこまで言い切るこ  
とが出来るのか？

「蒼太がどこかで会ったことがないかといくつかの場所を上げ

たんだが、そこであいつらが反応を見せたのはふたつ。博物館と外国。」

「そして、今まで彼らが集めたというプレシヤス。絵画に宝石、刀に楽器、これは冒険で手に入れたというより、盗んだと言ったほうが良い」

「その時のあいつらの反応は、アシュが獲物を狙っていたのを見つけたのと同じものそして、手に入れたものを自慢するのと同じものだった」

2人の言葉に、4人は納得した。

「人の心を読むことに長けた蒼太と、観察することに長けた映士が言うのなら調べてみる価値はあるな」

明石の言葉を合図に、それぞれ調べ始めた。蒼太とさくららはICPOの資料を、明石と真墨、菜月は映士の持ってきた過去犯罪一覧を。そして、映士は古文書を。

資料を調べて1時間ほど経った時だった。

「蒼太、映士、これ」

真墨が何か見つけたのかそれを2人に見せた。それを見た映士は、すぐにそれに関係するものを、持ってきたものの中から探し出した。

「うん、それみたいだね」

蒼太が真墨の持つてる資料を見て頷いた。映士もあつたぞと、声を掛けた。

「どれどれ、何が書かれているんだ？」

3人も真墨が探し出したものを覗き込んだ。

—Lupin? 年齢不明、国籍不明、血液型不明、本名不明。アルセーヌ・ルパンの孫と名乗っているが詳細は不明。国際指名手配の犯罪者。数々の国で盗みを働いている。変装の名人。被害総額は数兆円と言われている。

—次元大介 年齢不詳、国籍不明、血液型不明、本名不明。ルパン三世の右腕。国際指名手配の犯罪者。数々の国で盗みを働いている。凄腕のガンマン。被害総額は数兆円と言われている。

—石川五右衛門 年齢不明、国籍不明、血液型不明、本名不明。13代目石川五右衛門を名乗っているが詳細は不明。ルパン三世の左腕。国際指名手配の犯罪者。数々の国で盗みを働いている。居合の達人。被害総額は数兆円と言われている。

「映士と蒼太の勘大当たりつてとこだな」

「でも、こんなやつはどうして見覚えがあつたんだ？」

真墨が問うと、2人は少し考えてから口を開いた。

「確か、まだ僕がスパイをしたとき、潜入先の博物館に盗みに入つたんだよ。ちゃんと見たわけじゃないから忘れてたよ」

「15年くらい前か？まだ父さんが生きているとき、家に盗みに入つたやつがいたんだが、たぶんこいつだ」

2人は、その時のことを思い出しながら話した。

「あの時は本当に驚いたよ。潜入の最終日だったんだけど、ガードが固くて中々ハッキングとか出来なくてね。

そんなとき、上へ下への大騒動。お陰で上手く情報が手に入ったよ。しかも、それは彼らがやったことになってね。本当にラッキーだったよ」

「あれは、ちょうど父さんが留守にしていた時だったな。俺様はまだガキだったから、家から出ないように言われてたんだが、退屈のぎに術の練習をしてた時に入ってきてな。いい練習だいになったぜ」

ちなみにこれが、そいつらの盗もうとした奴な。そう言って、いくつかの古文書と資料を置いた。その数はざっと見ただけでも100は超えてる。

「これ全部調べるのか？とんでもない数だぞ」

そう言って、真墨が溜息を吐く。

「そんなことを言っている暇があるなら手を動かしてください。皆さんもつやっていますよ」

さくらの言葉に、顔を上げるといつもは面倒くさいと愚痴を言っている映士までもが次から次へと資料を捲っている。

「そうはいつでも、別に盗まれると決まったわけじゃないんだろ？予告状も来てないし」

「予告状なら来ているよ」

なおも真墨が言い募ると、突然画面にボイスが現れた。そして、右の画面にその予告状が映し出された。

「『10月31日、サージェス保管のプレシヤス神の雫を戴きに参ります。Lupin?』か」

「てことだから、よろしくね。」

それだけいうと、ボイスは消えた。

「それじゃあ、ボイスからの命令も出たことだし改めて、こいつらの潜入方法から逃走経路。徹底的に調べるぞ」

「『『了解』』』」

「わかったよ」

真墨も渋々ながら、そう言った。

### 第三話

「それで、どうするんだルパン？」

「あやつらが此方を探っているのなら、対策なども立ててくる筈。一般人の策ほど面倒なものはない」

2人が言うと、ルパンはニヤリと笑い、言った。

「大丈夫だって。確かに面倒だけど、所詮一般人だぜ。本職に敵うわけないだろ」

そう言つて、ルパンはテーブルに紙を広げた。

「これは、見取り図か」

「そういうこと。明日、一旦潜ってみるぜ」

「明日？急ではないか？」

ルパンは、ペンで印を点けながら言う。

「なぐんか嫌な予感がすんだよな。気のせいだとは思つが、見てくりや対策も立てられるしな」

ルパンの言葉に、次元と五衛門は顔を見合わせた。お宝に関しての彼の勘は、折り紙付きだ。

「なら、止めることは出来ないのか？」

次元が言うと、ルパンはうーんと唸りながら、でもな、それやったらとぶつぶつと呟いた。

「ルパン、お主まさか」

「あー、うん。もう予告状出してきちまったんだな、これが」

その言葉に、2人は溜め息を吐いた。ルパンはそれにムツとして、拗ねたように言う。

「何だよ、その顔は。良いじゃねえか、欲しかったんだから」

そんなルパンに呆れていた2人だったが、ふと五右衛門があることに気付いた。

「ん？欲しかったって、それはお主が決めたのか？不二子殿から強請られたのではないのか」

「はあ？誰がそんなこと言ったよ。俺は、自分が欲しくて予告状だしたんだよ」

「珍しいな、お前が宝石を欲しがるなんざ」

次元がそういうと、五右衛門も頷く。宝石の担当は不二子。日本の歴史的価値のある者は五右衛門。拳銃に酒関係は次元。伝説にかかわるもの、またはあるかどうかかわらないが大げさで世界をびくりさせるようなのがルパンと、大体は決まっているからだ。

今回の者は、伝説はあるが今までの者よりも信憑性が薄くまる

でお伽話だ。だから、彼ではなく不二子が宝石狙いでルパンに頼んだのだと思っていたのだ。

「まあな。けど、どうしても欲しいんだよな。ついでに、さっきの学芸員。あいつ見たら、よけい盗みたくなっただよな」

「何だ、知り合いか？」

そんなわけないんだが、とブツブツと言っていたが、まあいいかとすぐに切り替えて言った。

「んじゃ、俺は裏から行くから次元は正面から。五右衛門は何か会った時の為に大気な」

「俺は誰に化けりゃいいんだ？」

そういうと、ルパンは何処から取り出したのか資料を広げ、その中の一枚を次元に渡した。

「何々、明石暁。元冒険家、通称不滅の牙。現サージェス所属の秘密部隊、轟轟戦隊ボウケンジャーチーフ。コードネーム、レッド。熱き冒険者。表向きはサージェス学芸員。ボウケンジャー？何だそりゃ」

五右衛門もひとつ手に取り、読み上げた。

「最上蒼太。元国際エージェント。現サージェス所属の秘密部隊、轟轟戦隊ボウケンジャー。コードネーム、ブルー。高き冒険者。表向きはサージェス学芸員。これは、さっきのおとこでござるな」

2人は他の資料も見えていく。

「伊能真墨。元トレジャーハンター。現サージェス所属の秘密部隊、轟轟戦隊ボウケンジャー。コードネーム、ブラック。迅き冒険者。」

間宮菜月。元トレジャーハンター。現サージェス所属の秘密部隊、轟轟戦隊ボウケンジャー。コードネーム、イエロー。強き冒険者」

「西堀さくら。元自衛隊、特殊部隊所属。現サージェス所属の秘密部隊、轟轟戦隊ボウケンジャー。コードネーム、ピンク。深き冒険者。」

高丘映士。現サージェスレスキュー部隊、及び秘密部隊轟轟戦隊ボウケンジャー所属。コードネーム、シルバー。眩き冒険者」

「そいつらは、SGSの切り札みたいなもんだ。プレシャス回収の専門チームでな、盗もうとしたら十中八九こいつらが出てくる」

ルパンはそう言って、テーブルを指でトントンと叩いた。

「こいつらはそんなに厄介なのか？」

「まあ、一人一人はそうでもないが専門職が集まってっからな」

「確かに。情報、戦闘、回収と必要なものは揃っているようだが、こ奴は一体？」

そう言って、高丘映士と書かれ書類を指差した。それだけは、前職について書かれていなかった。

「それがわかんねえんだよな。他の奴等はアッサリわかったんだが、こいつだけは全然」

ルパンは首を振り溜め息を吐くと、続けた。

「けど、噂じゃあ霊能力者らしいぜ」

「霊能者？」

2人は驚いたように顔を見合わせた。

その顔は、んなもの信じられるかというのと、何でそんな奴があんなところにと言うようなものだった。

「霊能者って、高丘さんのことですか？」

3人が話していると、通りがかったウェイターが声をかけてきた。

「知ってるのか？」

「ええ、この辺じゃ有名ですよ」

彼は笑顔でそう言った。

「そうか、ありがとな」

話を聞き終えた三人はお礼を言いつと店を後にした。

「で、どうする？作戦を変えるか」

「いんや、まずはこのままだ。帰って準備しようぜ」

そういつて、三人はアジトへと帰って行った。その後姿を見つめる人影に気付かぬまま。

### 第三話（後書き）

ほかの5人はともかく、映士は監視者の時に普通に街中歩いてたみたいなんで、あの恰好は目立つだろうと思いました。それと、普通に前職聞かれて術者と答えそうなんで。

ちなみに、映士はそのカフェの常連設定です。

## 第四話

「おい、例のモノの行方はつかめたのか？」

「勿論。例の水晶はSGSってところの博物館に展示されている」

ちつ、と男はひとつ舌打ちをすると他のはと尋ねた。

「あの楽の音を憶えているものなら一人だけ見つけたよ。でも、これがなかなか捕まらなくてね。贄も力はあっても使い方が分からないとか、使えても力なんてほとんどないとか」

「場所や物は見つかったと言うのに、肝心の贄や巫女が見つからないとは」

「仕方ないよ。元々数自体少ないのモノだからね。まあ、目星をつけているのならいるけどね」

それに、男は無言で先を促した。

「一人は、この娘。何でもレムリアの血を受け継いでいるらしいよ。巫女としては有望だよ。もう1人は彼。この時代には珍しく、力と知識の両方を持っている。しかも、神獣の血も引いてる。神官にも贄にも使えると思わないか？」

彼の言葉に、男は笑みを浮かべると彼を近くに呼び、顎を掴むと耳元で囁いた。

「お前はほんと優秀だよ。流石、俺が認めただけはある。良いだろう、そいつらを捕まえろ。そうすれば、我らの望みは叶う」

「わかってるよ、スサノオ。すべては、彼女たちを助け出すため」

「期待しているぞ、ロキ」

そうして、彼らはくすくすと笑った。

「おい、お前。こんな所で何をしてる？」

S G Sの一般人立ち入り禁止エリア。そこで、一人の男が呼び止められた。呼び止めたのは、黒いジャケットを着た青年。

「何だよ、別に俺がどこに行こうがお前には関係ねえだろ」

そう言って振り返ったのは、銀のジャケットを着た青年。

「確かに関係ないね。けど、今は予告状が届いてバタバタしてるんだ。勝手な行動をするなよ」

「そりゃ悪かったな。けど、お前だって」

2人が話していると、突然警報機が鳴り響いた。すぐに館内放送がかかった。

「ただいま、館内の二階で火事が発生しました。お客様は職員の指示に従い、速やかに避難してください」

2人は頷くと、同時に走り出した。向かった場所は、二階。

「たくつ、どういうことだよ。こんなの聞いてねえぞ、ルパンの奴何やってんだ」

「につしつし、簡単簡単。やっぱ、プロには敵わないって」

ルパンは、笑いながらパネルを外した。今彼がいるのは、ボウケンジャーの面々が集まるサロン。その天井裏。

「おーおー、いるいる。赤にピンクに、黄色か。しっかし、ここに女の子はレベルたっけえな」

彼はそういうと、慌ててパネルを元に戻した。いきなりさくらが、彼のいる方に視線をやったのだ。

「どうした、さくら」

「いえ、今少々不快な視線を感じましたので」

「何もないぞ？気のせいじゃないのか」

「そうそう、気のせいだよ。予告状が来て気が経ってるんだよ」

「そうですね」

その会話を聞きながら、彼はほつと息を吐きだした。

「おっかねー。流石元特殊部隊、鋭いな」

彼はまたパネルをずらすと、中の様子を窺った。

「それにしても、蒼太さんに映ちゃんって凄いよね。ルパンに会った二度目なんですよ」

「そうだな。一生に一度会えるかどうかなのに、二度目だもん」

「でも、そのおかげで対策が立てられるんです」

彼女の言葉に、2人はそうだなと異口同音に頷いた。

「あーあ、菜月も早く泥棒さんに会いたいな」

菜月はそう言って、テーブルに両肘をつき顔を載せ溜息を吐いた。

「そんなふうに言わなくても、予告日はもうすぐなんですから」

すぐに会えますよ」

「ああ、そのことだが当日は2人ずつ交代で見張るということになった」

「わかりました」

三人が警備のことで話し合っていると、慌てた様子の蒼太が入ってきた。

「大変です。あの水晶のことで、新たなことが分かりました」

そう言って、パソコンを繋いで正面のモニターに映した。

「調べていてわかったんですが、あの伝承には続きがあるんです。『蒼い月の夜、星の祭壇へと雫を捧げよ。神の笛の音と共に。さすれば、奇跡起こらん。されど、赤き月の夜神の血と笛の音、巫女の歌。三つが揃いしとき、冥界の扉は開かれ闇に覆われん』」

「此处に書かれている神の血、笛の音、歌というのは」

明石の質問に、蒼太は首を横に振った。

「わかりません。けれど、笛の音というのは最初に書かれているものと同じだとは思いますが、他は」

「これは、ただの伝承と言い切れないかもな」

そう話していると、いきなり警報機が鳴り響いた。

「ただいま、館内の二階で火事が発生しました。お客様は職員の指示に従い、速やかに避難してください」

「チーフ！」

さくらが声を掛けると、明石は頷いた。

「菜月とさくらは真墨と合流して、客の誘導を。俺と蒼太は映士と連絡を取り急ぎ現場へ。ミッシェンスタート！」

彼が指を鳴らすと共に、彼らは動き出した。

「火事、ねえ。なーんかありそうだな」

そういうと、彼もまた現場へと向かった。

・設定 ルパンfamily(前書き)

ちょっとした人物設定です。読まなくても大丈夫です。

## ・設定 ルパンfamily

ルパン達は、コミックのYルをイメージしてください。

私のイメージでは、ルパンと次元は三十代半ばから後半。五右衛門は、明石と映士と同年です。つまり、24才です。それを踏まえての設定を書きます。

## ・ルパン三世

アルセーヌ・ルパンの孫で世界を股に駆ける大泥棒。女好きで、自他共に認めるプレイボーイ。本命は不二子。以外に冷たいところがある。IQ300の天才。基本、赤ジャケット。36、7位。まったく言っていないほど鈍く、他のメンバーが見えるほどに強い霊でも、1人だけ見えなかった。ただし、影響は受ける。昔、仕事で蒼太とバッティングしたことがあり、彼の仕事を自分のせいにされた。また、若いころに映士の家に盗みに入ったことがあるが、何も盗めなかった。

## ・次元大介

元傭兵のガンマン。ヘビースモーカーで、常に煙草を啜っている。名実ともに、ルパンの一番の相棒。女は嫌いではないが、不二子は苦手。37歳くらい。目が良い。霊感はある。特に強くもないし、弱くもない。

・石川五右卫門

石川の13代目。気が付いたらいつの間にか消えている。その場合は、修行に行っている。純粹な戦闘技能だけなら、三人の中で一番。五感も鋭く、第六感も鋭い。女が苦手。三人の中で、唯一マスキなしの素で女装が出来る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5850y/>

---

ボウケンジャーVSルパンfamily

2011年12月30日22時46分発行